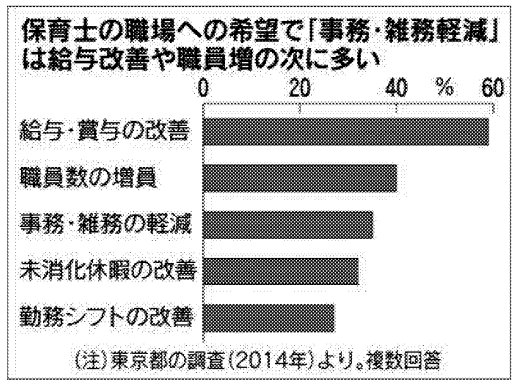
保育の質 ICTで向上

首都圏の保育所が保育の質を高めるためにＩＴ（情報技術）を利用する動きが広がっている。昼寝中の子どもの呼吸のチェックや、保護者と円滑に連絡を取り合うため、ロボットやスマートフォン（スマホ）を活用する。安全性向上や保護者とのやりとりを緊密にする効果を生み出し、子どもを安心して預けられる環境づくりを進める。



日中の様子を保育士がスマホで撮影し保護者に配信する（東京都世田谷区）

連絡帳はスマホ

事務負担 軽減に

見守りロボ

睡眠の異変感知

首都圏の保育所

東京や千葉などで「あい・あい保育園」27カ所を運営するグローバルプリッヂ（東京・墨田）は8月、墨田区内の認可保育所で乳幼児突然死症候群（ＳＩＤＳ）の予兆を察知する見守りロボットを試験導入する。群馬大学との共同開発で、布団の下に専用パッドを敷き、センサーで感知した肺の動きを解析。昼寝中の子どもの肺を1秒間に4回チェックし、異変を感知する。

ロボットは園内に置き、異変があると一部が点滅したり、パソコンなどに警告表示が出たりする。厚生労働省は0歳児では5分ごとの呼吸チェックを推奨しているが、人間の目視などには限界もある。貞松成社長は「ロボット導入で見守りの精度が高まる」と期待する。試験導入の結果を検証し、来春から導入施設を順次増やす方針だ。

家庭での様子を連絡帳に書いたり、欠席の連絡をしたりする作業をスマホでできるシステムを導入したのは、社会福祉法人、あすみ福祉会（埼玉県入間市）。今春から東京や埼玉、神奈川などで運営する「茶々保育園」全14カ所で使い始めた。

欠席連絡などは従来は保護者からの電話を保育士が受けていたが、こうした業務を削減。連絡帳が手書きからスマホに切り替わり、保育所での日中の様子を写真で送信することもできるようになった。システムはリクルートマーケティングパートナーズ（東京・中央）の「キッズリー」を使用。端末レンタル料は全園で月間計約70万円要するものの「保護者と保育士のやりとりが緊密になれば、クレームも少なくなる」（迫田健太郎理事長）。

社会福祉法人ユーカリ福祉会の市川保育園（千葉県市川市）も昨夏、ソフトバンク系のサービス「ハグモー」を導入した。保護者がスマホで保育の様子や連絡事項を確認できる。斉藤武園長は「事務処理に要する時間が3割ほど減り、子どもと関わる時間が増えた」と話す。

東京都が２０１４年にまとめた保育士の調査（複数回答）によると、保育士が職場に希望することのうち、35％が「事務・雑務の軽減」を挙げた。都は17年度予算に、事務負担の軽減につながる情報通信技術（ＩＣＴ）の導入費用を補助する新事業を盛り込んでいる。

掲載日 2017年06月29日 日本経済新聞 地方経済面 東京

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。